

平和日本のありがたさ、そしてその礎となられた多くの戦死された英霊に感謝しています。二度と戦争の無いことを望みます。合掌

第五二号駆潜艇奮戦記

埼玉県 原 口 喜三郎

私は大正十年十月十三日埼玉県北足立郡吹上町で生まれました。昭和十六年鴻巣市で徴兵検査、見事甲種合格。徴兵官より笑顔で「良い体をしている」とほめられました。内心父母に感謝したことです。

昭和十七年九月一日、横須賀海兵団に入隊した当時の私の家庭は次の通りです。

父母、農業。田は一・五町歩、畑は十町歩。畑のうち八反歩は桑畑で、養蚕をする。長兄、生後一週間で死亡。次兄、中支衡陽作戦で戦死。三兄、小学校一年生で死亡。長女、他家へ嫁ぐ。私四男、東京でクリーニング店勤務。五男、中支に出征―無事生還。六男、

家業手伝い。妹四人、家事手伝い。

大世帯で、豊かではないが、まあまあ状態で忙しく働く家庭でした。復員後四男の私が家業の農業を後継しております。

海兵団に入隊し三カ月は新兵教育です。予想通りの苦しい厳しい辛い日の連続は、数多くの物語、戦記、従戦記等の語り伝えで周知の通り。何くそ！と頑張つて難関を通過しました。新兵の一個分隊は二四〇人。十二教班（二教班二〇人）に分かれます。私は第九教班でした。二〇人のうち三番以内に入るとどこでも進級が早く、私は運良く一番になり、特別扱いで優遇されました。勉強もよくやりました。ハンモックが通路の電灯の下にありましたので一生懸命に本を読み、上級学校者に負けぬよう努力出来ました。運も良かったと思います。

新兵教育が終わり、ウエーク島（硫黄島とミッドウェー諸島の中間で南方）へ配属です。敵の潜水艦攻撃が烈しく、私たちも乗船（商船―輸送船）が三回やら

れ、呉港へ引き返して二〇日間もいたり、いろいろ待機・船待ちで任地のウエーク島に着くまで二カ月も要しました。最後は「諏訪丸」(一〇五〇〇トン)に三個分隊が乗りましたが、敵潜の魚雷を受けて浅瀬へ乗り上げ、海中に投げ出されたり、苦心の末やっと島へ着きました。

ウエーク島では陣地構築と敵飛行機との交戦、敵上陸部隊の迎撃訓練などでした。このウエーク島にいる間、私も蚊にさされ Deng 熱にやられて苦しみました。

そのうちにウエーク島を離れて横須賀へ帰りましたが、帰日も二回乗船が敵の魚雷にやられて沈没し、運よく助かりました。こんなに危険な戦況では日本はどうなるのかと、戦友と密かに話したことでした。

次は大阪のナニワ造船所へ部下十人を率いて行き、「第五二号駆潜艇」の機装竣工を応援しました。この駆潜艇は、

乗組員——二〇人 高角砲——八センチ一門

機関砲——二五ミリ四機

二連装の機銃——三ミリ一機 小銃——一〇丁

爆雷発射管——爆雷五〇発積み込み、二基

以上の装備の頼もしい艇です。これの機装に私共軍人十一人は造船所の従業員と共に夜を日について作業を行いました。結果として艇の船首より船尾までの細かい部分も充分手にとるように理解、掌握出来ました。

さて艇の竣工と共に、私たち乗組員は、「さあ、今までは散々敵潜にやられたそのお返しに、今からは敵潜を片っ端からやつつけろ」と勇躍して、新しい任務の第七艦隊に入り、小笠原諸島の父島を基地として、毎日夜敵潜の哨戒に精根を傾けました。一一直配置も「再三再四の猛烈さ。五二艇には敵潜撃沈の戦果を示すマークが三つ描かれて、私たちはまさに意気冲天の勢いでした。

敵潜撃沈の証拠は、油とか装備品、積込品、死体等の浮上状況を自艇のみでなく他の友軍の航空機、艦船により確認証明されることが必須条件です。

母島より陸軍の部隊五〇〇人を三回で計一五〇〇人を硫黄島へ運びました。「陸軍さん！頑張ってください

さい。武運長久を祈ります！」と手を振り帽を振り別れました。無念にも、無残にも硫黄島守備部隊は勇敢闘の甲斐なく玉砕全滅。護国の英霊と散った勇士に台掌あるのみです。

サイパン島失陥後、父島が敵の艦砲射撃を受けました。硫黄島攻略の陽動作戦かもしれません。とにかく敵艦の砲が四連装で発射すると、火花が四個横並びに出ます。島の港の上空を越えて山地へ弾着。敵の観測飛行機が誘導して弾丸が次第に港へ接近してきます。山の麓に建つ島民の家が瞬にして吹き飛びました。数十戸の部落が壊滅しました。

その問われわれは何をしていたのか？「反撃は？悲しいことに、敵艦の位置は日本軍の砲の射程外。無為に敵の攻撃を見守るだけの不甲斐なさです。そのうちに敵の弾着点が迫ってきます。やむをえず我が艇は軍艦旗を下ろして港外へ退避。悔しさいっぱいでした。

いよいよ戦局もさらに苛烈を加える昭和二十年八月

七日、私の従軍体験中の白眉として強く心に残る「第五号駆潜艇の奮戦記」の戦闘を次に申し述べます。

従軍以来、切歯扼腕を続けた私達海軍魂が積年の鬱憤を晴らさんと、佐世保鎮守府へ移り、昭和二十年八月七日佐世保軍港を出港し、商船「雪川丸」を護衛して朝鮮の鎮海まで送る予定でした。翌八月末明、対馬海峡付近で敵の哨戒機一機と遭遇しました。「雪川丸」は対馬の漁港へ入港させ駆潜艇は沖繩に打電をしました。胴体二つの敵戦闘機二〇機が来襲、それを見上げた時、入道雲が発生し、まるで我々に襲いかかってくるような感じを受けました。いよいよ今日が最後の日になるのかなと覚悟を決めました。

そのうち伝声管で艇長命令「肉を切らして骨を切れ。近くに引き寄せてから打ち方始めの号令がかかると。それまで、絶対に撃ってはならぬ」とのことでした。が、敵機は容赦なく二〇機が一斉射撃で撃ってきます。まるで上甲板に豆粒を転がしたような音がします。穴だらけになり、初弾で第一配備員がかなり戦死し、我が方も号令を待たず応戦のやむなきにいたり発砲し

ました。八センチ高角砲がドーン、二五ミリ機関砲がダンダンと、二連装一三ミリ機銃がドドドド、小銃がバンバンと、これらが連鎖して仕掛け火花のような音。上空からは機銃弾とロケット弾が二機ずつ交互に襲いかかってきました。

約三〇分ぐらいと思われる戦闘でしたが、それはそれは言葉では言い尽くせない物凄い戦いでした。敵の爆弾投下により、至近弾で艇は航速が止まり、艇の塗料がはげてサラサラと落ちてきたことが数回ありました。そのうち敵機は弾丸を撃ち尽くしてしまつたのか引き揚げていきました。

戦闘が終わり漁港へ帰り錨を下ろした時、気がつく和我が方は大分損傷し大破の状況で、艦橋が三分の一吹き飛んでいました。艇長は重傷、戦死者二四人、負傷者数一〇人、主な戦死者は機関長、分隊長、掌砲長、信号長、測距長等でした。戦果は後日聞いた話では、撃墜六機との由。これは対馬の三個所での見張所からの報告によるものだそうです。我が艇も三回ぐらいは波の間で見えなくなつたそうです。乗組員の射手

の中のある猛者は、敵弾を受けて片腕を失い流血の滴るのも顧みず砲の引き金を片腕で引いて勇戦力闘したこと、戦友の語り草となっています。

とにかくよく戦いました。島の漁港では村長さんを先頭に、漁師のお母さんたちを連れて八隻の通船で救助に来てくださいましたが、上甲板を見上げた時、あまりの物凄さに驚き、顔をそむける仕種をされたとのことでした。無理はありません。上甲板には死体がゴロゴロ、重傷者のうめき声、血と火薬と油の三種類の臭いで、これが即ち断末魔と言うのかなと思ひました。

しかし気をとりに直して重傷者から順に通船に移し、対馬の陸戦隊の医療所へ運び手当てをいたしました。私も額を弾丸がかすめ出血が多く、顔中が血だらけのため早く乗船させられましたので、後のことは不明です。

その晩のうちに出港命令が下り、鎮海まで「雪川丸」の護衛を完遂し、佐世保港へ寄港し、感状が授与されるとのこと、二人の士官が受領に鎮守府に向

きました。奇しくも終戦の日でした。そのため感状は表彰状に変わりました。一生の良き思い出として大切に保存してあります。尚この表彰状は第五二号駆潜艇の総乗組員一二〇人のうち、全国で六九人に授与され、私も幸運にもその名譽に選ばれたのです。

最後に終戦、復員となり隊員それぞれ故郷へ帰ることになり、生死を誓いあつた戦友とも万感の思いを握手にこめて別れました。復員の順番はまず志願兵、次に応召兵、そして現役兵の順でした。私の最終階級は一等兵曹でした。

佐世保から埼玉県吹上町まで六日間を要しました。支給された食糧は三日分しかなく、ポケットサントリ―をなめながら帰りました。自宅の近くに小学校があり、北海道の部隊が駐屯中でした。帰宅当日演芸会をしていたのが私の気に入らず、敗戦の今日とんでもないと怒って大声で怒鳴り込んだことでした。

復員帰宅後は農業を後継し養蚕に励みました。次兄が中支で戦死していて、未亡人が残っていました。弟

の私と逆縁で夫婦になりましたが、気の毒にも早く死亡し、亡き夫の傍らへと旅立ちました。幸少ない女性でした。

その後今の妻と結婚。子どもは先妻に男一人、現妻に男一人、孫は計三人です。家業に努力すると共に、青年団長、農耕組合長、農器具近代化（国の資金を導入してトラクターその他の機械類を購入）の委員長、その他農業の発展、近代化のため尽力して、県知事表彰を受けました。四十一歳の時、町議会議員となり、四期連続当選し議長も務め上げ、後進に道を譲りました。

毎年一回は戦没した戦友の冥福を祈り、現戦友の懇親のため靖国神社へ参拝し、近くの温泉へ行き、若い青春時代の思い出や、海軍魂に花を咲かせ、慰霊祭も数回重ねて、生きて帰った者の責任を果たすよう心がけております。

新兵時代に受けた厳しい教育や賤や辛苦も、考え方をかえて災いを転じて福にする不撓不屈の軍人精神からみれば、労苦は試練となり人間を向上大成さす妙薬

とも受け取れます。町議會議員、青年団長その他団体の役員をしてゆく間、人には言えぬ苦しみ悩みを抱えて、昔の苦しみを思いだし、何くそと頑張り、苦境や難局も打開克服した尊い思い出も、すべて一言で申せば海軍魂のおかげと肝に銘じております。

海軍は滅びました。しかし海軍魂は未だ健在です。昨近の何とも言えぬ世相に鑑み、若い日本人に魂の教育を重んじて欲しいと切に祈ります。

海軍従軍記

愛媛県 清水 政栄

私は大正十一年三月二十七日、愛媛県上浮穴郡久万町の生まれで、昭和十八年八月十七日佐世保へ入団（現役）しました。

当時の私の家庭の状況は、父母と長男の私、第三人、妹七人の十一人の子供の大家族でした。

農業を営んでおり、水田の三反、畑五反、山林は七

町で、杉林が主で雑木林も少しありました。

さて、海軍へは同郷の壮丁三人同時入団で町内の三島神社へ集合、祈願祭の後私が代表で挨拶をし、久万町より松山市内へバス、船で広島へ汽車で佐世保へ出ました。戦後の結論ですが、三人すべて無事生還しました。めでたいような申し訳ないような。

佐世保では、私一人汽缶の方へ、他の二人は水兵ということで別れ別れです。海兵団の新兵教育は三カ月間。毎夜整列してお尻へ精神棒をたたき込まれます。一人でも悪いと団体責任でやられます。お尻が黒くなって、入浴の場合はタオルを巻いて隠したものです。その外に洗濯物を盗まれるという苦勞もありました。自分の物以外に古兵の物、班長の物いろいろです。靴下一枚無くなっても大変。周知のことながら、員数合わせは恐ろしいこと。

盗まれたら盗み返せとは言いますが、皆盗まれぬよう警戒しているし、もし見つければただでは済みません。あれやこれやの難関を乗り越え、悪条件を克服して行かねば。とにかく洗濯物では毎日必死の綱渡りの